
刹那の姫に愛の手を

沙璃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

刹那の姫に愛の手を

【Nコード】

N8848Q

【作者名】

沙璃

【あらすじ】

緑豊かで恵まれた資源により、小さくも栄華を誇るファルタ国。

国を統治する王と妃の愛情を受け育った18歳の皇女、ローズは眩いほどの美貌を備える娘へと成長した。国で随一と謳われる美しさは誇りであると同時に、世間と隔絶した生活を強いらせる原因でもあった。

それは幼少期に彼女の美しさを妬んだ魔女によって呪いを掛けられ、人生に際限をつくられたため。

存在を匿われて王城で退屈に過ごすローズのもとへ突然、隣国の王子からの求婚話が舞い込んでくる。彼女の数奇な人生が、愛により形を変えていく…。

甘くも切ない王妃と王君の大人ラブストーリーです。

（※更新停止中）

囲いの姫君。 (前書き)

この世に生を受けた者は誰しも、人生には限りがあるものだ。

それなら私は、気高きままで生涯を終えたい…。

囲いの姫君。

小鳥のさえずりに木々の擦れ合う音、そして暖かな日差しによって今日も眠りから覚めることが出来る。

ゆっくり瞳を開ければ映る真っ白な天井を眺めて、“ああ、まだ今日も生きられる”のだと小さく安堵する。

眠りに就いてしまえば、もうこのまま目覚めないのではと不安に駆られるのも、こうして朝を迎える度に安心するのも常であるから。寂しい気に苛まれる闇夜に慄いたり、眩しい光の朝日を見られるのも、あと幾度なのだろう。

これは私だけの秘密であり、誰にも言えない小さな嘆きだけれど…。

深呼吸して起き上がった時にタイミング良く、コンコンと規則正しく響いたノック音。それに応じれば寝室のドアがガチャリと開かれた。

ベッドに腰掛けている私を認識すると一礼ののち入室して来るのは、シェリー。

数年前からずっと私の専属でお世話をしてくれる侍女だ。

「ローズ様、おはようございます。お加減はいかがでしょうか？」

「おはよう、シェリー。大丈夫よ、今日もとても良いわ」

「それは大変ようございました」

ベッドから抜け出たばかりで寝間着姿に、ふっと柔らかな笑みを浮かべてくれる彼女。

私より2歳上で20歳のシェリーは優しくて気が回るから、きっと朝の心境には気づいているだろう。しかし、彼女はただの一度も尋ねて来たことがない。

シェリーとともに寝室を出た私は、控えていた他の侍女たちが準備をしていた器でゆっくり顔を洗う。ブロンドの髪を香油をつけた櫛で幾度となくとかし、洗いたての顔にはおしろいをはたいてくれる。そしていつも通り私の要望から、動きやすいフレアが控えめな空色のドレスを着せてくれた。

しかしながら、お部屋から外へ出るにはルビーのネックレスを欠かしてはならない決まりとなっている。

このやけに重い首飾りや華美な装いをするのは、お食事の時だけだと諦めているけれど、これはいつまで経とうが好きにはなれない。

腰元まで伸びたブロンドの艶やかな髪。変えられてしまった金色の瞳に、なだらかな曲線を描くドレス姿。そして天井と同じほどに白い、血色のない白すぎる肌。

大きな鏡面に映る自身の顔つきや身体つきは、成人である15歳の時よりもさらに大人びているというのに。未だ成長しているこの身が朽ちるのは、いったい何時なのだろう…。

「ローズ様、いかがなさいましたか？」

「いえ、行きましょう」

鏡に映る自身を見つめる私を窺うようにシェリーが訪ねて来たので、ニコリと穏やかな笑みを浮かべて返す。椅子を立ち上がり部屋を出れば、朝食を取る為に距離のある王宮内をシェリーや近衛たちに囲まれて歩いて行く。

「ローズ様、お加減はいかがでしょう？」

「大丈夫よ、とても調子が良いの」

その道中で時を見計らったように尋ねられるのが、近衛からの手厚すぎるお伺いである。

もしも調子が悪いとでも言えば、王宮内が大騒ぎとなる事態を招くやり取りのため、ここでも気を抜いてはいけない。ひとりひとりの視線に注意しつつ、笑顔で卒なく歩くことにも慣れている。

父である王に言わせれば、王宮内を歩いて体力を使って欲しくないそうだが、これだけが私の日々の楽しみなのだから頂けない。

ようやく食事の間へ到着すると、ブラウンの観音開きのドアをそれぞれ同時に開けられた。すると周りを囲んでいた者たちが一斉に退き、フレアが控えめなドレスの裾を手にして膝を折る私。

「おはようございます。お父様、お母様」

「ええ、おはようございます。ローズ、席へ着きなさい」

「失礼いたします」

執務に忙しい両親と兄であるが、朝食だけは私が心配という理由から余程の事が無い限りは家族で取るのが慣例だ。

「おはよう、ローズ。気分はどう？」

「おはようお兄様。大丈夫ですわ」

両親である王と王妃の許可が下り、兄の隣の末席へと談笑しながらも静かに腰を下ろした。

古くから水や緑といった資源に富んだ小国が、このファルタ国である。

何をせずとも恵まれた環境にあり、それらを望む隣国との関係も良好なファルタは、ここに住む民も穏やかな人ばかり。農産物など食物がたくさん収穫でき、まず食に困る者が居ないため。

私の誇りである温かな国を治めているのが、父である現国王のサイネス3世。そして民に慕われている美しき母こそ、王妃のマーガレットだ。

侯爵家の令嬢であつた母のあまりの美しさに心奪われた父が、“後宮は不要”と頑なに拒んだ事はあまりに有名な話。これはもちろん、ラウルお兄さまという王子が生まれたことにより叶った話なのだが。とにかく今も変わらない王と妃の熱々ぶりに、民から羨望の眼差しが注がれるのは穏やかなファルタの象徴であるし。

兄である王子にも婚約者がおり、あと1ヶ月後には婚礼の儀が行われることになっている。多くの幸せに満ちた大好きな国に生まれていても、自身の身体だけはそれとは染まらない。

魔女からの呪いを纏った、残り僅かな余命であろう私は――…

限りある所以。(前書き)

限りある命だから大切にしたいと思うけれど。

この呪いを受け入れられる、強さが欲しい…。

限りある所以。

両親の後宮問題が解決した兄の誕生に続き、3年後に生を受けたのが私こと、ローズ・ラルム・オーガスティンである。

豊かな土壌と資源に生まれた幸せな皇女として、時には厳しくも優しく温かく育てられたことは大きな誇りだ。

幼少期は侍女や騎士らを困らせるほど活発で、華やかなドレスでも構わず動き回るものだから、周囲は殊のほかお世話に大変だったことだろう。

お城の誰よりも落ち着きと無縁だった幼少期は、恵まれたファルタ国内と触れ合える山々へと出掛ける事が大好きだった。

小鳥のさえずりを聞きながら、木の実や野花を集めては自然とふれ合い、料理人の作ってくれたご飯を美味しい空気を吸いながら皆と食べる一時も好きだった。

それが突然に変化したのは4歳をすぎたある日。伸びやかな生活からガラリと変化を遂げてしまったのだ。

「おや、噂通りに可愛らしいお姫様だね」

大きく揺れた太い幹の下で絵本を読んでいると、ふわりと白い光に

包まれた女性が前触れもなく現れた。
王族の有する領土にもかかわらず、昼下がりの陽光とは対照的に不気味な笑みを浮かべる黒ずくめの人。

「あなたはだあれ？」

「ローズ様！」

怪しげな者の襲来によって近衛たちは楯となってくれたが、とても危険が察知出来る年齢に及ばずに首を傾げるだけ。
今にも剣を抜きかねない兵士と抱き留める侍女らに守られつつも、その怪しげな雰囲気に興味を抱いてしまったのだ。

「あたしかい？あたしは…」

「、うわあああ」

しかし、杖をつきながら声高に笑う人物が何かを唱えた瞬間、私の周りを囲んでいた者たちが一斉に吹き飛ばされてしまった。
瞬時のことに辺りを見渡すだけで、先ほどまで傍にいてくれた侍女らの名前や助けを請う声は恐怖で出なかった私。歯と歯がぶつかり合い、カタカタ震える時点で初めて“身の危険”を覚えるのは遅すぎた。

風の勢いでローブに覆われていた顔がすべて見えれば、痩せこけた

世にも恐ろしい白すぎる肌の女性。しかし背に木の幹が貼りついたように動けず、逃げられない怖さで頬には生理的な涙が流れる。

無力な幼い姿を嘲笑いつつ名乗った彼女こそが、魔族でさえ敵わないとされる魔女だった。

「……」

再び何かを呟きはじめたのも束の間、ピタリと言葉を発するのを止めた魔女。

その僅かな時間では強張った小さな身体が言う事も利かず、ブルブル大きく体が震えるだけの私。それを再び楽しむように舌で唇をペロリ舐めた彼女は、今も忘れられないまさに恐怖の象徴だ。

「ローズ：おまえが綺麗に咲く前に死んでもらおうと思ったが、あたしゃ面白いことを思いついたよ。

おまえの寿命を縮めて、それが“いつ”か分からぬ恐怖に怯えて生きるってのはどうだい？」

「…え、…や、だ」

年端もいかぬ4歳といえど、死の怖さは知っている。

ちょうど私が4歳を迎える前に、前国王の祖父を亡くしたばかりだったから。フルフル小さく頭を振って抗えたのは、幼い私なりに出来た必死の抵抗だった。

「おお、綺麗なままで死にたいかい。そうか、ならば望みを叶えてやろう。

いつ死ぬか分からない短い命で、せいぜい恐怖を味わいながら朽ちるが良いわ…」

「…い、やああああ！」

ただしどう足掻いてみても、すべてが愉快と言わんばかりに笑う魔女にはなす術もなかった。

長い爪にゴツゴツ骨ばった手を此方へ近づけ、ブツブツと何かを言い始めた魔女を見たのはソレが最後。

吹き飛ばされた近衛たちの知らせを受け、ようやく駆けつけた大勢の兵士たちが発見した私は異様な光に包まれていたという。また薄気味悪い魔女の姿も消え失せていたらしい。

“この姫は若く美しきまま、黄泉へと早く召されるだろう”

木の下で倒れていた私の小さな手が握っていたのは、魔女が残した“カウントダウン・メッセージ”。

見た目には何も外傷は無かったものの、幼い身体に呪いをかけられたせいか意識回復が出来なかった。

数日経っても眠りから覚めない娘を案じ、執務に忙しい父と母も寝ずの看病をしてくれたと、のちにすべて侍女から聞いている……

「…ローズ様、どうなさいましたか？」

「え？いいえ、今日も空が青いわね…」

逃れられない恐怖と物思いに耽っていれば、茶器の載ったワゴンを手にしたシェリーが尋ねて来た。

その顔には心配の色が濃く映るから、悟られないようニツコリ笑顔を作って返す私。

納得いかない様子でティータイムのセットをする彼女に、小さくホッと溜め息を吐き出してしまう。

魔女の呪いを受けてから5日目に目覚めたけれど、その開いた瞬間から変わっていた現実。

何をしても異様なほど疲れやすく、以前のように動き回れる体力を奪われたと嫌でも気づかされた。一転して病弱となった身体へ変化し、広大な地を駆け回るのも疎遠となった。

そのため国中で名の知れた医者や薬師を密かに呼んでは判断を仰いだが、誰もが皆“治療方が見つからない”との結果だった。

栄養をつける為のお薬やお祈りやまじないが施されようとも、魔女の絶大なる力に及ぶものは何ひとつ見つけられない。

「明日は庭園でお茶がしたいわ…、ダメかしら？」

「いいえ、あとで許可を取りますね」

だから“体力が失われた身体でどこへも行かせられない”と、籠の中の鳥に近い日々を送っている私。

今日も大好きなシェリーをお相手に、自室でのティータイムが一番楽しい時間となりそうだ。

このまま静かに人目にも触れず、残り少ないであろう人生を終える
と思っていたのに――…

愛しき物との対面に。 (前書き)

愛など知らず、静かに終わるものだと思っていた。

知らないままでした方が、良かったのだろうか…？

愛しき物との対面に。

ある日の午後、王宮内に働く者らがばたばたと忙しく奔走していることに気づいた。

ただでさえ磨くところのない宮殿内を丹念に掃除し、珍しく侍女らの活気ある声が響き渡っている。

そして窓を開け放っているのだろうか、いつも美味しい料理を提供してくれる調理場からは、こちらまで芳しい匂いが届いてきた。

さらに窓へと目を向ければ、お抱えの庭師らが総出で庭園に咲き誇る花の手入れに躍起になっている。

そして窓の向こうから見える、父の執務室には何度も大臣や宰相らが忙しく出入りしていた。

あいにく会話が聞こえないのは残念だけれど、あの神経質な大臣の気難しげな表情を見れば頬が緩んでしまう。

お父様はきっと、あの大臣の小言を適当にあしらっている筈だもの。とてもお優しいけれども、必要なことと要らないものの分別が、即座につくお方だから。

ファルタ特有のぽかぽかと陽気な気候の中、ほぼ室内に留まってい

る私にはそれら総てで“何があるのか”すぐに察しがついた。

「シェリー、…お客様ね？」

侍女の中で唯一私つきの彼女だけ、今日に限りまったくお部屋を出て行こうとしないところが決め手だ。

さすがというのか、頭の回る彼女は不躰な問い掛けにも表情には出さずに、ニコリと笑ってくれた。

「…ええ、お察しのとおりでございます。

今日はなんでも、隣国のお方が急に来訪なされるとか…」

「あら珍しいのね。シェリーはお仕事大丈夫なの？」

「はい、もちろんですよ。

私はローズ様にお付きすることが、何より大切ですよ」

そう微笑んでくれた彼女は、ファルタ国の特産物である茶葉を使つて、今日もまたとびきり美味しいお茶を淹れてくれる。

ひとりきりのティータイムが寂しく思わず済むのも、いつでも変わらぬ優しい彼女の存在あってこそ。

シェリーの立場を省みずに無理を言い、すべてに付き合って貰う私はきつと迷惑を掛けているだろう。

それでも優しい彼女の存在は、あまり外へ出られない毎日のささやかな楽しみだから感謝し切れない。

「あのね、シェリーお願いがあるの。

あとで庭師が終えてから、少しで良いからバラを観に行っただけじゃないかしら？

あのピンクローズも、きっとあと数日で枯れてしまうから間近で観たいの。

隣国のお客様もまだお見えにならないでしょうし、…お願い」

「ローズ様…、ですが」

「私の身体なら大丈夫よ？

今日は体調も良いし…、外の空気を少しだけ肌で感じたいの」

彼女をどれほど困らせているのかは承知のうえで、どうしても叶えたい思いを口にしてお願いした。

ティーカップを手にして喧騒を眺めながら、今後の慌ただしさを邪魔しないことが私の唯一の仕事。

だけれど、雄大な庭園に咲き誇るバラの命が尽きる前に、体調が良いとしても観たくて堪らない。

「長居は難しいでしょうが、少しのお散歩でしたら…」

一瞬の躊躇いを打ち消すように微笑んでくれると、寒くならないようにと簡単に私の身支度を始めたシェリー。

“ありがとう” と言えない関係がもどかしいけれど、その分はとびきりの笑顔を返すこととしている。

正式に許可を得てから準備を終え部屋を出れば、外で待機する近衛らに四方を囲われて王宮の外へと出た。

王宮内からでは感じられない、ポカポカとした太陽の日照りに小鳥のさえずりや木々の揺れる音が優しく迎えてくれるよう。

「少しだけ、ひとりにさせて貰えるかしら…？」

「かしこまりました、ローズ様。

我々はすぐ傍でお見守りしていますからね」

近衛の中でも一番の力を誇るという、男らしいマークのお言葉にも“ありがとう” は返せないからニコリと笑って頷いた。

彼らの仕事を邪魔するのが、護衛される身の私とは申し訳ないけれど。

視界に入らない所まで、足音立てず静かに去ってくれる彼らにも感謝するばかりだ。

「…良かったわ、」

よく手入れされているとはいえ、草を踏みしめる感触は“まだ生きている”と自身を奮わせてくれるパワーを与えてくれる。

その一言が漏れ出ていたのは、お目当てのピンクローズが庭師のお陰か、また綺麗に咲き誇っていたからだ。

その清廉な姿に頬が緩み、いつまでの命かも分からない私に少しの力と勇気を与えてくれる――…

「――何が良いのだ？」

「・・・え？」

美しいピンク色の薔薇に見惚れていたせいで、その声の主に気づいた時には遅かったのかもしれない。

出会わなければ良かった…、是がそう思わずにはいられない貴方との初対面だったの。

瞳に囚われし時。(前書き)

鼓動の高鳴りを、知らずにいれば良かったの？

だけれど、出会いはさらにそれを加速させる。

瞳に囚われし時。

耳慣れない声音で振り返ってみれば、柔らかなオーラを放つ若い男性と対峙することとなった。

少し離れたところから大勢の者が囲うあたり、かなりの権力者であることには違いないだろう。

心地よい風が、ふわりたなびく度に深緑のマントを揺らす姿は優雅そのもの。

間違いなくこの国の方では無い——いいえ、私は見たことがないだけかもしれないけれど。

もしも是が異常事態ならば、周りで見守ってくれていた近衛らが、直ぐこちらへ駆けつけてくれる。

それ以前にここは王族の領地であり、お城から歩いて来れば幾許もないところにあるため。

国でも兵ぞろいの兵士らによって嚴重に囲われている領内へと、不審者が簡単に侵入できる訳が無いわ。

マークも均衡を保ったまま心配げに視線を向けているけれど、まったく状況を把握できない。

あれほど夢中で観賞していたピンクローズを忘れ去るほど、その麗しいお姿に言葉も出せずにいた。

じわりじわり徐々に近づいて来る殿方は、いったい誰なのかしら…？

「君がお噂の、ローズ嬢か？」

見慣れない清んだアイスブルー色の瞳で捉えられての問いに、思わずビクリと肩を揺らしてしまう。

何が噂なのかは分からないけれど、コクリとゆっくり首を縦に振って肯定することにした。

「美しく全てがヴェールに包まれた皇女として、この近隣では知らぬ者は居ない」

「あの、私はヴェールなど…」

初めての状況に戸惑いつつ声を出したものの、自身で分かるほどその声色は震えていた。

ヴェールに包まれているというより、ただ外に出られないでいる弱き娘に過ぎないのだ。

敢えて言えるとするならば、魔女の呪を受けたところだけはヴェールに包まれているだろう…。

「声も顔に違^{たが}わず可憐なのだな」

「と、とんでもございません！
わたくしは…え、と？」

滅相もないお世辞を初対面の方から受ければ、あまりの羞恥に頬全体は朱が走ってしまう。

あちらこちらへ頓挫する思考に困惑していれば、対峙する男性には愉快に見えたのか一笑される。

「ああ私は怪しい者ではない、安心していい。
この城の庭園は素晴らしいから、所用の前に立ち寄らせて貰ったんだ」

「そうだったのですね。
私もこの庭園が大好き…いいえ、この草花を肥やしてくれる、ファルタの優しい気候が大好きなのです」

「ほお、誇りか——自国を姫が誇るとなれば、今後もファルタは安泰だろう」

「ありがたきお言葉に感謝いたしますわ…」

精悍な顔立ちに委縮していたはずが、その眼を細めて笑う表情に、心が一瞬で解きほぐされていたの。

幼き頃から見知った殿方しか知らない私にとって、初対面である大人の男性との会話に、小さな鼓動は早まらない訳が無かった…。

「ではローズ姫」

「はい、何でしょうか？」

「また会おう…、いや必ず——」

「っ・・・」

美しく強いアイスブルーの瞳に捉えられ、お誘いの言葉とともに取られた手ヘリップ音を立て口づけを落とされる。

その柔らかく温かな感触を残された私は、颯爽と周りの者たちを従えて立ち去る後ろ姿を目に焼きつけていた。

この時はまだ、貴方の正体も名も知らないまま。

そして自身に芽生えていた感情が、何かも知らずに……

瞳に囚われし時。(後書き)

拙いストーリーをご覧下さり、本当にありがとうございます。

こちらはさらに大変マイペースですが、地道に励んでいきたいと思ひます。

どうぞよろしくお願いいたします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8848q/>

刹那の姫に愛の手を

2011年7月18日06時17分発行